歴史民俗資料館建設の基本的な考え方

平成30年11月22日

1　はじめに

新しく歴史民俗資料館を建設するにあたり、渡名喜村としてどのような歴史民俗資料館にすべきか、資料館に何を期待したらいいのか等、歴史民俗資料館建設構想について考えをまとめていくことが必要である。

今後、変化の激しい社会を、私たちはどのように歩んでいけばいいのだろうか、どのような未来が来るのだろうかと悩み答えを求めるが、その解決策を教え、自分自身を知る手がかりを示してくれるのが歴史や民俗であると言われている。ですから、私たちは歴史や民俗について学ぶことが求められるのである。

このように、歴史民俗資料館は「現在と過去との対話」をする場所であり、過去を知り未来への展望をもたしてくれる場所、また、私たちが自分自身の立っている足下を深く学び、誇りや愛着を抱き、アイデンティティを形成していくところとして、とても大切な場所である。

そこで、歴史民俗資料館建設における基本的な考えをまとめていく。

2　基本的な考え方

（1）　渡名喜の歴史・民俗・自然について学ぶことができるようにする。
（2）　歴史を知り、過去を知り、今と比べて未来への展望につながるようにする。
（3）　多くの村民に親しまれ、訪れる人が何かを学習し発見出来る場所にする。
（4）　渡名喜の歴史、沖縄の歴史、日本の歴史、東アジア・世界の歴史と考えが広がっていくようにする。
（5）　渡名喜らしさが強調され、なおかつ、そこから沖縄や世界の様子が伺い知れるような内容にする。
（6）　足下を深く掘り起こし、地域への愛着と誇りが醸成出来るようにする。
（7）　地域を知り、内外に渡名喜を紹介出来る場所となるようにする。
（8）　資料の収集・作成・整理・分析を行い過去の姿を正確に表現するようにする。

3　方針

（1）　子どもから高齢者まで活用でき、村民が交流出来る場所になるようにする。
（2）　里帰りして気軽に立ち寄れる場所になるようにする。
（3）　島を出て行く子ども達に島への愛着や誇り、そして自信を抱かせるような内容にする。
（4）　物の陳列に終始するのではなく、何度でも足を運びたくなるよう内容になるよう工夫する。
（5）　身近な歴史や習慣・由来・伝承など村民が知りたいこと、得たいことを提供できるようにする。
（6）　高齢者及び村民が児童生徒・来訪者へ案内し説明するなど、高齢者及び村民の活躍する場を設け生きがいづくりにつながるようにする。
（7）　包括的克つ具体的な展示になるように工夫する。
（8）　渡名喜の個性が見えるようテーマを設定し展開していく。
（9）　渡名喜の歴史・民俗等について理解が深まるよう、視覚的な展示及び体験を行うなど、五感を活用した内容にする。

渡名喜村歴史民族資料館基本構想

平成３１年３月２６日（火）
歴史民俗資料館建設検討委員会

歴史民俗資料館建設の基本的な考え方に基づき、展示構想を策定していくのですが、あらかじめ、渡名喜島の歴史・民俗・自然について認識を深め、全体像を掌握した上で構想の策定をしていきます。

1　第１回目の協議における課題「自然の内容を包含するには、名称に自然を挿入すべきではないか」について
→　学問的な位置づけは未だ分からないが、他の民俗資料館の状況を調べてみると、歴史民俗資料館に自然の内容を含めているところが多くある。
・日光市歴史民俗資料館・・・日光の自然や歴史
・奄美市歴史民俗資料館・・・考古　歴史　自然　民俗等
・茨城件神栖市歴史民俗資料館・・・考古　民俗　自然に関する企画展　　等

⇒　※　名称を「渡名喜歴史民俗資料館」とし内容は自然・歴史・民族等に関する事

2　沖縄貝塚時代前期・・およそ 3500 から 2500 年前
(1)　東貝塚・・・一番古い貝塚
・他の地域では琉球石灰岩崖下に貝塚を残しているが渡名喜の東貝塚は砂丘上に立地
・石器　　石斧２　磨石２　叩石
・貝製品　　夜光貝製の貝匙　　バチ型貝製品
・イノシシの骨　魚の骨　多量に発見
・伊波式土器　荻堂式土器
・奄美系土器が多量に出土・・・奄美との交流　→　外海文化と接触

⇒　遺骨が出土していない　戦前ｴﾝﾇｰﾔｰ（又吉）家を建てる時屋敷から人骨がでた。
山に入るとハブ　最初に住みつき長い期間住み着いただろう
地下浅いところから水脈があったのだろうか
※ 生活の様子を模型で表現する。出土遺品の展示　貝塚人　道具　等　一つのセクション（ブース）

3　沖縄貝塚時代中期
(1)　ユブクの遺跡・・・海岸からほど遠い台地や丘陵上の縁辺部
・大きな集落をつくる
・見晴らしの良い台地に竪穴を掘り
・石器　　石斧　　石皿　　磨石
・チャート黒曜石の石鏃　・・　弓矢に使用
・土器
・遺跡は現在確認出来ていない。

⇒　獣を追い回す生活

4　沖縄貝塚時代後期

○　遠浅の海を控えた広々とした海岸砂丘地帯　・・　人口が増加

(1)　アーカル原貝塚　・・・後期の中では古い時期

・尖底土器が多く出土
・石斧
・土器
・貝殻　　獣魚骨
・平地式住居跡
・埋蔵人骨１体　　うつ伏せ人骨の写真

(2)　アンジェーラ遺跡　・・・標高６㍍

・弥生文化が定着
・土器片（カメ型土器）
・貝製品

(3)　西底原遺跡　・・・後期後半　集落・貝塚・墓地から構成された遺跡

・埋蔵人骨　多数　　共同墓地に多数
　第６号人骨　　第３号人骨
　第１号から第６号人骨
・カメの骨　　魚の骨　獣骨
・カメ型土器

⇒　前期から続く生活様式を表現する。出土した人骨の展示　出土品土器
地形の模型　住居の模型　奄美との交易の様子（ルート　舟の模型）その構想図
貝塚時代（2300 年間）の生活の様子を図・絵・模型で表現する。（年配者から子供までが理解しやすいよう展示に努める）　遺跡場所の写真や図
※ 一つのセクション（ブース）を作り展示する

5　グスク時代　・・・　稲作　麦作を中心とした農業が急速に発展

(1)　里遺跡

・多量の炭化米や炭化麦が発見　　米　　大麦　　小豆　　木の実
・牛の遺存骨
・鉄器文化の波及と農具の鉄器化
　鉄製の武器や武具　　鉈　　鏃
　鉄製の農具や住宅用具　　鉄釘　　鉤　　鎌　　鍬　　へら
　　鍛冶址（鍛冶の跡）
・中国の陶磁器　　青磁器　　青銅製品

(2)　スンジャグスク　・・・　逃城

(3)　アマグスク

(4)　その他

・　入砂島　・・・　新しい遺跡
・　渡名喜に人が住み始めたのは３千数百年前　・・・　原始共同体

⇒　里は渡名喜の聖域　シンボル的存在　　４つの御嶽との関係を表示
４つの御嶽と里、各グスクの位置（場所）の写真・図
琉球王朝との関係についての説明　　南風原（渡口）家系図・家紋等

御嶽とシマノーシ等との関連説明
※　一つのセクション（ブース）を作り展示する。

6　琉球王国時代
○　おもろそうし（1623年）　・・・　となき　　既に首里王府の統治下
○　歴代宝案の中の符文に杜那琦（尚円王時代　唐船の副団長）
○　中国への航海ルートに位置し早くから認知されていた。
　　烽火・・遠見番（アマグスク近く）
(1)　近世渡名喜
・久米代官　　久米方代官　1660年ごろ
・琉球国高究帳に「戸無島」とある
・近世を通じて渡名喜島の石高が４５万～４６万　・・・水田は圧倒的に少なく畑地
・渡名喜は島が小さいうえに耕地が少ないので農業だけでは生活は成り立たない。
→　各島々に出かけて交易などして生計を立てている。　　球陽（1811年）
・船隻の建造　不毛の地　蘇鉄の植栽　桑の植栽と養蚕
・那覇士族翁能哲が1712年に久米島に渡り桑、ガジュマル等の樹皮を用いて製紙の製法を伝授。
　翌年、粟国　渡名喜に渡り桑を植え、養蚕をなし綿糸の代米引き合いのこと
→　渡名喜の人々の生活は
　　耕地が狭小にしてやせている。石ころや砂利が多いため農業にははなはだ不利
　　台風による潮害しばしば起こる。　・・・・飢饉　はしか　天然痘
→　傾斜地を利用して蘇鉄を植える。段々畑を拓く。桑　養蚕　鱧の油　畳　ムシロ
　　牧畜
→　島外との交易　渡名喜の人々は航海の術に優れており、また海運も盛ん
・1670年　座間味の親雲上が渡名喜の地頭を兼ねる。
　その後いつの年代か不明だが、渡名喜専轄の地頭が立てられ1879年琉球処分まで続いた。
・1842年5月20日　ペリー来航　　牛　山羊　サツマイモ　を提供する。
⇒　渡名喜島の名前の変遷　　役職名とその役割の図解　南風原親雲の辞令書・表彰状のレプリカ　現代語訳　　琉球王国の様子と島の生活の様子等の関連図解
上門の古銭の展示　沖縄へのペリー来航図の展示と渡名喜との関連図解

7　近代沖縄　（明治・大正時代）
(1)　自治体の移り
・1896年　明治29年　島尻郡に位置づけられる。
・1897年　明治30年「沖縄県間切島規定」により
　　間切・島→町村　村・島→字　に変更
・明治41年　渡名喜島が渡名喜村に変更
　　初代村長　上原正助　　明治42年
→　1855年から1860年　安政　桃原村（今の字）　　1871年　廃藩置県
　　1868年　明治元年　　明治41年（1896年）　渡名喜村始まる
・明治20・30年代　渡名喜豚の名、著聞し
　　那覇港内（泊）に渡名喜小屋　　牛　豚の販売　・・・　商活動
・ぺりー提督が沖縄に立ち寄ったとき、渡名喜の島人がくくりつけていた牛を見つけ、

→　狭小な耕地に制約された農業の限界を打開するために豚・牛の飼育と取引
・明治 20 年ごろ　　山を焼く　　宮城牛地頭代
→　名目はハブ退治であるが、人工増による耕地の拡大がねらい
・小学校の創立　　明治 22 年　　仲村渠平治地頭代

(2)　山野原を拓く
・孤島　　作物の不作　→　餓死
・人口増　島内だけでは支えきれない。
→　男は活動の場を農業外　・・・　交易　漁業　　山原船で交易
　　女は農業　畜産　・・・　平地では芋と粟　　段々畑では芋と麦
　　子牛　子豚　を飼育　那覇で販売
→　食料確保の耕地の拡大が必要　→　開墾のため山を焼く
・山を焼く　明治 20 年ころ
→　耕地が拡大され、子供が生まれると山野原のいくつ坪かを割り当てられる。
→　渡名喜薪（トナキタムンとして有名）が採れなくなり、薪を売る島から買う島へ
　　日常の生活にも困る。
・養豚　婦人の手で飼育　渡名喜豚（トナキウヮー）
・豚の飼育　明治の中頃　泊に渡名喜小屋・・・　マーラン船（帆船）で搬出　または
　くり船（トウーヤーシャー・サバニ）　・・　子豚
　　大正期　発動機船　　・・・　成豚を出荷
　　全戸で飼育　　琉球王朝時代から飼育
・牛の飼育　　戸数８０％で牛を飼育　琉球王朝時代から飼育
　　原野で放し飼い　　山を焼いて後は各家庭で飼育

(3)　漁業
・旧暦６月２５日　カシキー・ウイミーの綱引き後
→　久米島へいか漁（１０月か１２月ごろまで　半年）
・カシキー前は貝拾い　・・・　　くり船に２・３人乗り
　本島沿岸　→　朝鮮サザエ　残波岬　恩納　本部　今帰仁　羽地　大宜見　国頭
　　辺戸岬　　伊計島　　宮城島
　奄美大島　→　タカセ貝　　ヒロセ貝
→　男は１年のほとんどが留守　農業をやり家族を養うのは女
　屋我地島に渡名喜の人の家がある

(4) 久米島への出漁
・明治３０年代から４０年代に定着
・真泊に小屋掛け
・くり船に２・３人　　島から１２０隻　　・・　２４０名
・赤瓦の家の建築資材の購入に充てる。
　毎年少しずつ材料を購入　暴風で壊れない瓦ぶきの家の建築が立派な男の勲章？
⇒　トーヤーシャーの模型と運搬の様子　久米島でのいか漁の様子（海岸のとまや）
サバニで島づたいに漁をしていく様子を図解　山を焼いた事の意味づけと段々畑
伝統的建造物群との関係を図示　　山原船で交易する様子やそのルート　山原船
の模型　　自治体の変遷と役職名の図示

８　鰹業

・慶良間の人の手による鰹業は明治３４年（1901 年）
　沖縄住民の手による操業として初
・渡名喜での鰹業　・・本土の人の手によって始まる。
　明治４０年代に始まる　　４２年に２隻
・明治４３年　土佐高知から講師を招聘し製造を学ぶ。
・渡名喜で帆船による鰹漁　明治３７年開始　　大正に動力船で操業
・本土の人の船で操業開始し、後に組合で購入し組合船として操業する。
・大正から昭和の初期に５つの組合　・・・　１組合４・５０名　村の男ほとんど全員
　大正１１・１２年最盛期　　１３年戦後不況　急速に衰退　不漁も
　大正末から昭和初期、経営難を抱えながら表面は活況　島の風物詩　　島中が鰹で生活
　男は１３歳から５０歳前後まで
・近代的な経営方法　（株式会社単位）・・・　漁労　製造工場　男女の分業　製品の市場への出荷
・発動機船建造費の高利の借り入れ　戦後恐慌のあおり　金融業の破綻
→　南洋へ出漁
・鰹漁業の導入とその発展によって港が東から西へ変更　・・　明治末から大正の初め
　鰹漁は漁場が慶良間や久米島周辺の海域であるため、帆船で東から出航するとかなりの時間がかかるため、西側へ移動。
⇒　大きなテーマ、１つのセクション（ブース）として大きく展示　　鰹漁の変遷（帆掛け　動力船　船名　大きさ　写真）　鰹漁の様子（映像での紹介　実物模型　写真　図　道具　船員名簿）　鰹節製造様子の写真・工程図示　水揚げの様子　漁獲高　付随する漁具の展示　渡名喜の進取の気性として（ｐ２５５）　鰹節の展示　鰹の大判・中・小のレプリカ展示　重さを比べるコーナー　　釣り上げる体験コーナー　　鰹釣り道具の展示（竿　針　網）製造道具の展示　薪）　釣り針作り等の体験コーナーの設置

９　交易

・明治半ばごろ
　那覇でトナチビン（泡盛を入れる壺屋焼）を購入・・奄美大島で販売（トナチビン小）
　大島から木材　芭蕉糸　タバコを購入　・・・　那覇で販売
・先島でもトナチビン小を販売
・年に旧暦の５月と１０月に島に寄港
　５月の山原船・・子牛 子豚 薪を積み那覇で販売　・・５月旅（グングァチタビ）
　１０月の航海　・・・　正月用品の購入
・廃藩置県後は大島との商売がうまくいかず漁業へ転業　　７４隻のくり船
・明治３９年（1916 年）１０月台風　・・　２隻の山原船が遭難　山原船を使っての交易が終了
⇒　１つのセクション（ブース）として展示　　渡名喜の進取の気性として
　トナチビンの展示

１０　海上交通

(1)　山原船とサバニ

・王府時代から明治にかけて　・・・　山原船　定期就航ではない。交易の時に立ち寄る。年２回

・急を要す場合　・・・　サバニ　　６時間

・子豚の搬出　・・・　サバニ２艘で（トゥーヤーシャー）

(2)　蒸気船

・明治３０年中　・・・　渡名喜に就航した汽船９隻　３か月で２航海

・明治２９年以降　・・・第三運輸丸（１００トン）那覇　名護　慶良間　　命令航海

沖に停泊　　伝馬船で上陸

役人か病人の利用がほとんどで一般人は利用しない。用件がなかった　月に１回

(3)　島の運搬船

・機械で走る貨客船　郵便船であった運輸丸（宮平正徳）　名護丸　　名草丸

・個人経営の渡名喜丸　１５トン　大正５・６年ころ

・渡名喜丸就航以前から鰹船は機械船であったが

鰹漁が最盛期を迎えると　・・・　燃料補給　鰹節の製品の出荷　薪購入のため運搬船が必要

天気の良いとき　　月に５・６回　　時化ると２０日、１か月もなし

・渡名喜丸は後に宮盛丸に改名

⇒　交易と同じセッションとして展示

運搬船の変遷（名前　大きさ　動力）写真　図解

１１　島の飢饉

(1)　明治３１年　大飢饉　人口９６４名　１６７戸

・台風被害　６月４日　２９日　　干ばつ

・明治３９年～４０年　暴風３日間続く　　人口１１７９名　１８４戸

粟国島から蘇鉄を購入

・渡名喜島の歴史は飢饉の歴史

村民を励ますため野崎校長が児童生徒に歌わせた　寅年の八大風

(2)　大正の飢饉

・大正３年　８回の台風　　大正４年３月まで被害　飢饉が続く

甘藷の被害　　蘇鉄を食す

蘇鉄も島では調達できず粟国島から購入

義捐金で九死に一生を得る

⇒　蘇鉄の生えている様子の写真　蘇鉄の鉢植えの展示　蘇鉄の実　笛の制作

蘇鉄の採集・調理方法（図解　映像）　蘇鉄料理の調理実演体験コーナー

飢饉の歌　飢饉の新聞記事・現代語訳　　窮状を訴える文書

県下で最も貧しいが・・

１２　南洋出漁

・積年の累積赤字と昭和５年の不漁　大暴風（６５年来）

全国的に農業恐慌が起こり農水産物が大暴落　・・・　鰹の相場が下落

→　渡名喜の鰹業は完全に息の根を止められる。

・南洋鰹漁は大正年間から着手し、昭和４・５年から急速に盛んになる。

南洋興発会社が手広く南洋開拓に乗り出す
・そのころ渡名喜島は２３０戸　鰹釣発動機船５隻
・昭和４年３組合解散
・村長　南風原健雄は村の再生は南洋遠征による外なしと判断　・・・島の運命を賭けた南洋出漁
→　村から１万円借り入れ　残り３万円は個人から借り入れ
昭和６年魚栄丸　得豊丸を南洋へ派遣
・２か年で４万円を償還
サイパン島２１３名　パラオ島３４５名　トラック島４６名　計５０４名
・年々３万円の送金
・操業船は会社の船と個人の船　宮古　本部　渡名喜（得豊丸）
渡名喜の人だけで組を組み乗船　１年を通して船の上での生活　南洋出漁の歌
一人配当金　月５０円　　給料は月々留守宅へ送金
・昭和１６年以降　配当金　月３００円～４００円
→　南洋出漁によって、渡名喜鰹業は黄金時代を迎える　・・・　島の生活は潤う
昭和８年以降上級学校への進学が急増
・昭和１８年ころ戦局が悪化し引き上げる。
⇒ 南洋の島々の地図　位置　距離　渡航時間　漁労の様子　島への仕送り・配当金（現在の金に換算した場合）出漁漁船名　出稼ぎ者名または人数　　鰹漁業のセッションに組み入れる　　南洋派遣への村長等の尽力紹介　漁業の様子

１３　太平洋戦争・沖縄戦
(1)　太平洋戦争
・パラオ、サイパン、テニアンに漁栄丸、金剛丸の乗組員等数百名
・「我れ身をもって太平洋の防波堤たらん」という精神訓が一般人にまで
一般人も青年団、警防団、国防婦人会ごとに総動員
・渡名喜島出身者も現地徴兵、防衛招集を受け部隊に配属　多くの戦死者
→　陸軍関係　２８名　　海軍関係　１５名　　戦闘参加者　　２８名

(2)　沖縄戦
・国家総動員体制のもと　　渡名喜の場合は魚類の供出が中心
水揚げ高に応じて重油を配給　供出に励む
・「欲しがりません、勝つまでは」という合言葉で生活が圧迫される
・渡名喜と粟国は最後まで無防備
・村民が初めて戦争を眼のあたりしたのが１０・１０空襲
島に残っていた３隻の鰹船（金剛丸　漁栄丸　豊泉丸）襲撃を受ける
漁船の破損
・１月１９日の空襲で運搬船第一むらさき丸が港内で沈没
・光泉丸（桃原祥吉所有）が渡名喜と本島を結ぶ動脈　　３月２３日の空襲で炎上
・空襲口説
・村民は２１年９月１９日　終戦を知る。
→　島は完全に孤絶状態　　餓死と戦いながら避難生活　山中の避難生活は餓死地獄
食料不足は村民の戦争体験の最も深刻な苦痛

⇒　１０・１０空襲の様子　犠牲者（軍属　一般人）の数及び犠牲になった場所の地図・グラフ化（人間の形で）、パネルで表示

１４　渡名喜の戦後

(1)　産業の復興

・配給に頼る生活　自給体制の確立が焦眉の急務
・復員者や家族引揚者が続々　戦後　人口１２５１名　一時２１００名
・食糧難に拍車をかける
・引揚青年男子　　島に活気　　青年会復活
・村有地を開放し開拓奨励　　甘藷の増産　　「耕し天に至る」
・渡名喜村水産組合が結成
・４６年７月　VP 型鰹漁船（VP３４号船　VP５４号船）２隻が配給され鰹漁の復活
・４７年７月　GM 船２隻が破船
・４９年に LCC 船が１隻追加　糸満漁船（豊栄丸）を個人が購入　計３隻
・１９４７年に南部離島６カ村と糸満間の航路が許可
・LCM 船（３８トン）が配船され貨客船として糸満に鰹節の移出　鰹節が飛ぶように売れる。
・戦後の鰹漁が最盛期を迎えるのは５０年代に入って、ガリオア漁船の配船後
・ガリオア資金により木造漁船の建造と配船　１９５２年　４隻　１５トンが配船
　豊栄丸　朝日丸　豊泉丸　漁栄丸
・すでに操業中の得豊丸（自己資金で建造？）とで５隻の鰹漁船
→　渡名喜は沖縄屈指の漁村
・漁場の荒廃と鰹漁業の不振　　爆発物の利用　米空軍の演習の激化
→　戦前と同様　南洋諸島の豊かな漁場に夢を馳せるしかなかった。
・１９６５年（昭和 40 年）３月　パラオへ　　70 年ごろまで
・パラオに行った人は高度経済成長の影響で本土や沖縄へ移住。
・60 年代に挙家離村で渡名喜は過疎化、若者労働力の不足
→　鰹漁船５隻が１隻に　　鰹漁から一本釣りへ
・バイラス病　１９４７年（昭和２２年）　６０年まで続く
・戦後農業の主軸は甘藷と養豚　　１９４８年（昭和２３年）種豚購入
・西森に山羊放牧
・１９４９年（昭和２４年）粟に代わる西瓜栽培

(2)　生活環境の近代化　―　離島苦（島ちゃび）の解消

①　医療と保険
・渡名喜は戦前から医師・助産婦がいなかった。
・１９４６年（昭和２１年）８月　渡名喜診療所開設　仲村朝慧医介輔
・公衆衛生看護婦　１９６０年（昭和３５年）

②　無線電信の開通
・１９５４年　１２月　無線電信の開通
・１９６７年　電話交換業務
・１９５６年　村営親子ラジオ開設

③　“文明の灯り”が灯る
・１９６２年７月１５日　点灯
・テレビ　第１号　役場　昭和６２年

→　村営の３事業（電気事業　船舶運送業　有線放送）

⇒　カツオ漁船の変遷（LCC　VP 型）　　パラオでの創業の様子　漁船名
漁獲高等　　戦後の復興の様子をパネルで表示　　沖縄の復興と対比
子どもたちの遊び　　バイラス病の芋畑

１５　交通・運輸

(1)　陸路の交通

・集落内を除けばほとんどが農道　人が踏み歩いてできた道
・断崖絶壁　アマンジャキ　自然石を積み上げ道を造る　戦時中コンクリートに改造
・農耕が婦女子に委ねられていたので、馬を扱えないためか馬の飼育が古くからなく馬による畜力運搬はなく、山岳地帯の段々畑を抱えているのに畜力利用はなかった。
・１９７２年（昭和４７年）　屋敷囲いのテーブルサンゴの石垣を村費でブロック積にする。　→　ハブの住み家の撤去　　道幅を広げ生活用排水溝造成のため

(2)　海上の交通

①　山原船とトゥヤーシャー

・渡名喜の男たちは王国時代から唐船、山原船に乗り込み各地で活躍する。
・大島旅　　那覇で陶器等を買い込み、奄美各地で販売
　　大島からは木材　芭蕉糸　煙草を求め那覇で売る
・先島旅　　陶器の販売
・明治期の３０年代まで、山原船が年２回
・トゥヤーシャーで運ぶ　　いか　子豚　急病人
・明治期までの村人は外部との接触を断たれていて日常生活も文化の流入も遅れた。
・山原船はカーヌイリー　ハントゥヤーの所有　１９０６年（明治３９年）台風で破損山原船による通航が途絶える。

②　定期船の就航

・１８９６年（明治２９年）第三運輸丸が離島航路の命令を受ける。（沖縄本島周辺への離島航路として明治１５年設立した海運会社所有）
・毎月１回就航する。　１０数年存続し、１９０７年（明治４０年）に解散
・次に３００トン級の海域丸　名草丸が就航　独占就航となる
・１９１７年（大正６年）運輸丸遭難　　代船国頭丸が就航
　第３運輸丸　→　運輸丸　海域丸　名草丸
・大正４年に毎月２回以上　年２４回以上の就航
・１９２１年（大正１０年）　小型の発動機船や村営発動機船が就航
・大正５・６年頃に宮平正徳の個人経営による渡名喜丸が就航
　那覇との人々の往来が繁しくなる　　運搬船は離島へき地の命綱
　昭和１０年頃まで就航

③　戦後の海上交通

・第１むらさき丸　１９３６年（昭和１１年）４月に初の村営運搬船として９年間就航
・１９４５年（昭和２１年）１月　爆撃により撃沈　漁船３隻も沈没
・戦後はアメリカ占領下で離島航路は許可されない。人々の往来は厳禁
・１９４７年（昭和２２年）航路が許可される。
・１９４８年　軍から上陸用舟艇 LCM（３８トン）４隻払い下げられ、仲里・具志川村

に各１隻　粟国と渡名喜両村で１隻　渡嘉敷と座間味村で１隻 ・・１９５２年まで
・１９５０年（昭和２５年）又吉重雄が漁船だったＭ舟艇３４号を改造し運搬船として就航　　次に焼玉エンジン１５馬力の木造船
・１９５０年　上原哲彦が１８トンの木造船　宗英丸を伊平屋の人から買い２０トンに改装し、糸満―渡名喜間の定期航路に就航
・国分丸（仲村渠広　経営）も貨客船（後に日昇丸に改名）として就航
→　定期航路として宗英丸国分丸が競合
・渡名喜丸新造（４８．９６トン　１２０馬力）１９５７年１２月７日　渡名喜―糸満
８年後　１９６５年（昭和４０年）渡名喜丸新造（５３．２２トン　２００馬力）
１０月２日就航
・１９６８年9月２３日　渡名喜丸破損　　１２月１７日　平和丸南側リーフに座礁
・渡名喜村と平和海運が合併１９７１年（昭和４６年）　３者合併（仲里村も）
その航路に充てるため第３平和丸を新造（２３０トン）　船体が大きく寄港できず、その間は渡名喜丸が就航
・１９７２年（昭和４７年）１月１２日　平和海運の第１久美丸（１７０トン）渡名喜航路に就航
・１９８２年（昭和５７年）フェリー那覇就航

⇒　山原船の模型　トーヤーシャーの模型　　運搬船の変遷（写真　大きさ　所要時間　運賃　乗客数　等）　マーラン船の文書

１６　教育
(1)　王府時代の教育
・一般の希望者を対象に学問所があった。
(2)　学校創立
①　普通教育に対する住民の意識
・１８８０年（明治１３年）　沖縄本島に１４の小学校を設立
・渡名喜尋常小学校を番所跡に創立
渡名喜は９年遅れて１８８９年（明治２２年）３月１日
黒板１枚　白墨　簡単な教卓
→　本来シミ（学問）は士族のするもの、百姓の子弟には学問はいらない
・明治３５年　新校舎　　在籍数が増加し民家を間借り（３０年間）
半日学校（２部授業）を余儀なくされる
・県は廃藩置県依頼教育に力を入れると言いながら、疲弊しきった間切・島に学校諸経費の一切を負担させた・・当時の住民として教育は大事であるにしても民力を超えた仕打ちで「公費の増加に不平を鳴らし」「学校を敵視し・・」
・小学校の授業料を徴収することが出来ない
・明治３３年　小学校令が改正され授業料が免除
②　児童と就学率
・小３年～中２が同じ学級に混同
全ての児童が読み書きが全くできない。勉学の意欲なし　方言しか知らない
・学齢人員　６歳から１４歳　１３９名中２６名が就学　就学率１８．７０％
その中で、５２名の女子児童全員が不就学

明治３５年　６８％　　明治４１年９２％
女児は明治３４年　１２名　　上原マサ　上原千恵
明治３６年以降は男子と同率の就学率

・当村民唯一の希望は住宅を綺麗にするにあり、故に瓦家盛に流行して、２・３人集まればその話になり、僅かな金があればその材料を購入し、１０年計画をもってその目的を達せんとす

→　渡名喜島に初めて瓦葺の民家が建築される。１８９５年（明治２８年）

③　義務教育年限と校名の変遷

・学制　－　明治５年発布　１２年廃止
・教育令　明治１２年　　義務教育年限は１６カ月
・改正教育令　明治１２年１２月　３カ年に延長
・渡名喜尋常小学校創立　明治２２年　１８８９年　創立時　３カ年
　同年１０月校名が渡名喜簡易小学校に改名
　翌年　小学校の修業年限が３カ年または４カ年、高等小学校２カ年または３カ年、４カ年
・明治２６年４月　渡名喜尋常小学校と改める
・明治４０年４月　渡名喜尋常高等小学校と改める
・明治４１年　　渡名喜尋常小学校に戻す（小学校年限６ヵ年）　―　高等科が併設される予定であったが設立されず、大正１３年までの１６年間、高等科のないまま放置される。

(3)　教育勅語と修身教育

・明治２３年１０月３０日　教育勅語発布　　皇民化教育　　忠君愛国の精神

(4)　大正期の教育

・１９１４年（大正３）６月から９月猛烈な台風　枯死状態
　１０月２０日以降スルル虫の発生　餓饉
・蘇鉄や芋粕を購入するため牛、豚、山羊、鶏を販売　しかし３割下落
村税収入は全く途絶え、教員給や学校経費も支出できなく教育に大きな影響
・食料事情の悪化　欠食児童の続出
　他村のように女中、子守等で村外に出すことはなく、まして幼少期を身売りすることは村の習俗として決してなかった。
・大正３年　第一次世界大戦が勃発　　～４年未曽有の飢饉
・大正６年「臨時教育会議」を開いて学制改革の方法を決定
　教育勅語の趣旨の再確認　天皇制国家主義のための教育

(5)　中学校進学難と育英事業

・明治時代の漁業収入　平均８円　中学校の毎月の学資５円を支出できる家庭はわずか比較的学費の掛からない師範学校を選んだ。
・裕福なウーヤヌハントーヤー　又吉和一郎　那覇の高等科へ進学
　カーヌイリーの南風原牛（驍）男子師範学校附属小学校の高等科へ進学・・すべての家財産を傾けた。
・宮平樽（秀夫）・・分家の貧しい家庭
・大正８年　貸費生制度　　３名の貸費で打ち切る
・１９５９年（昭和３４年）村育英会が発足

(6)　戦前昭和期の教育

①　村の疲弊と教育

・大正８年から１０年の鰹漁最盛期が過ぎると漁獲高の減少　漁場の遠隔化　経費の増大　値段の暴落
・昭和に入ると　・・学校教員の窮迫の状況は筆舌に尽くせない

② 軍国主義教育
・１９３１年（昭和８年）　満州事変勃発　　１５年戦争へ
・個人主義教育が排除
・「思想善導」（国体観念を養い、忠孝第一をもって国民の思想の根本としようとする）「精神作風」
・歴史教育に力を注ぐ
・１９３７年（昭和１２年）「国民精神総動員法」　銃後の意識を国民に叩き込む

③ 国民学校と決戦下の教育
・１９４１年（昭和１６年）３月１日　小学校令が改正され国民学校令が実施
「国民学校令」　・・　国民は皇国の道に則りて普通教育を施し国民の基礎的鍛錬をなすことを目的とする
・尋常高等小学校が国民学校に改名
・皇民化、軍国主義の強化につながる。戦争を聖戦と美化し、その推進力としての教育がなされる生徒に改正　一億一心　勤労愛好　滅私奉公　公益優先
・１９４１年第一次世界大戦
・本校教育勅語
・村民各団体　・・　国旗掲揚式挙行後ラジオ体操会

(7) 戦後の教育

① 沖縄戦と教育
・半日授業
・９月初旬　座間味から日本の敗戦を伝えられ、初めて村民は敗戦を知る。
・学童は全員無事であったので授業を速やかに再開できた。
・教師たちは無報酬

② 初等学校の開設
・国民学校の教育が廃止
・１９６１年（昭和２１年）４月　初等学校令　８年制の初等学校と４年制の高等学校を創設
・米軍政府教育部によって占領下の沖縄教育に対して厳しい監視の下、すすめられる。

③ 学制の改革
・１９４６年（昭和２１年）日本国憲法が制定
・１９４７年　教育基本法　学校教育法が整備される。
・１９４８年（昭和２３年）新学制　義務教育９カ年制
・渡名喜初等中学校となる
・１９５２年（昭和２７年）琉球教育法により小中学校となる

④ 教育委員会の発足と教育税
・１９４８年（昭和２３年）教育委員会法が制定
・教育行政の民主化　教育運営（地方分権）　教育の自主性
・教育税の増加に抵抗
・渡名喜村立学校給食にパン製造開始　１９６０年６月　捕食給食実施
・校舎の新築

⑤ 教員の研修と実験学校の指定

・研究指定校　クラブ活動　１９５７年発表
・南部連合区指定　生徒指導研究発表会　１９６８年（昭和４３年）
・体力づくり推進校発表　１９７８年から３年間

⇒　学校の創立から学校の変遷　写真　児童生徒数　校長名　就学率の変遷
義務教育年限と校名の変遷　　学校の歴史年表　　ラジオ体操の発足

１７　社会教育
(1)　夜学会と補習学校
・明治２２年～２６年　久留島粢訓導　夜学会
・明治２７年から　山崎訓導　引き継ぐ（４カ月）
・その後佐渡山安栄訓導　補習学校　明治３８年まで
・明治３６年　渡名喜村男子実業補習学校の設置　・・　運営は専ら講師の熱意によって支えられていたが、学習意欲も高く、明治４０年頃から大正６・７年頃が最も盛んで不参加者、遅刻者がなく成績が一段と上がる。
・１９２６年（大正１５年）青年訓練所が設立　　補習学校は廃止
・青年学校　１９３５年（昭和１０年）発足
　兵士の養成　戦闘要員の錬成　　軍事産業に奉仕する要員の養成
・幻燈会
(2)　青年会（団）活動
・王府時代から明治にかけて
　ワカムンジュリー（若者揃）　ニーセージュリー（２才揃）　年中行事　綱引き
・青年文庫を設置　大正１２年　　高織講習会
・青年団は収容機関
・独自の計画によって運営されたのではなく、学校・役場の指導

⇒

１８　人物
(1)　比嘉筆助（１９２７年～１９４５年　８０才）
①　筆助誕生
・宮平牛（ウェーキヘーバラドンチ）が中城間切からもらい子（蒲）
・蒲はアバシーヤーの娘と恋仲（上原吉次　ナガヒギーンメーの妹　）
・蒲夫婦はウクマチヤーの後継者となる
・筆助は父　蒲　　母　マカの長男として１８６６年　慶応２年　誕生
②　ハブ捕り
・村民はハブを見つけると筆助に話す。必ず見つけ捕獲する。
・ハブは生け捕りにし那覇の血清研究所に送る。無償
・ジー（まじない　呪法）をハブにかけ気力を失わせる。
・母マカの兄　ナガヒギーンメーが奄美から習ってきた呪法
・ダラジー（だれさせる呪法）　集めたり・退散させるジー
・３０才からハブを捕り８０才で死ぬまでの５０年間
・日々の糧となる収入になるのでもなく、ただハブ咬傷によって尊い人命を失わない

ようにするため
・ハブに咬まれ変形した筆助の左手
③　アダンとハマヤイ
・防潮林の植林　－　村に委託されたわけでもないが山に行くついでに２・３本づつ運んでアダンを植えた。その内側にユウナの枝を刺した。
・浜の砂、台風で海岸線の浸食防止としてハマヤイ（ツキイゲ）　チバナー（ハマアザミ）の種子を播種した。
④　裸足の村民
・道に転がっている石、ガラス破片、ヤキチャーの骨を拾う。
・縫い針の処理
⑤　井戸掘り枠の創案
・大正中期まで村ガー５つのみ（ﾆｼﾊﾞﾗｶﾞｰ　ﾍｰﾊﾞﾗｶﾞｰ　ｸﾋﾞﾘｶﾞｰ　ﾆｼｶﾞｰ　ﾍｰｶﾞｰ）
婦女子は農耕でくたくたに疲れている中、遠いムラガーから水を運ぶ。
・砂質であるため、井戸を掘るのに多量の砂を掘り出す。崩れて人が埋まる。
・昭和１４年頃、井戸掘り枠の創案
・衛生面、婦女子の過労からの解放
⑥　グルク山の蘇鉄
・自分の持山グルク山の蘇鉄をすべて提供　昭和１９年から２０年８月まで2000本
・無欲な筆助は有る限りの蘇鉄を村民に分け、自分の家には貯えがなかった。
⑦　古グショー
・一人で黙々と撤去作業に取り掛かり２・３年がかり無報酬で撤去した。
・生活の足しにもならない、然も人の嫌がる仕事を家業を顧みず精魂を尽くした心情
⑧　優れた自然観察
・異常ともとれるほど物を緻密に観察する。
・アシハブ
猛毒のアシハブを捕獲し　　マダラトカゲモドキ
国立科学博物館に収蔵
・１本の粟
肥料の中に混じって芽を出した季節外れの粟の苗を大事に育て、これまでの適季とは違う時期の粟より多く実った。
これまでの播種時期を変更し実りを多くした。
・蘇鉄花の交配
蘇鉄の雄花の花粉を雌花に振り掛け、雄花の花弁を雌花に差し込む。
人工交配で収穫を多くした。
学理は知らなくても自分で実験したことを念入りに調査し、その結果を村人に伝え増産。
・ヤハタグサの駆除
・黒い石　マンガン鉱発見
→　清廉潔白な性情、人を愛してやまないその心情、深い宗教心に支えられた処世観によって、彼の一生は赤貧に甘んじつつ、社会のために全身全霊を打ち込んで燃え尽きた。家には全盲の妻女を抱え、生きるための最低の糧に堪えつつ、生涯の大目標である世のため、人の為に自分が何をなすべきかを見定め、これに向かっていかなる艱難に遭っても心を移すことなく、まっしぐらに突き進んだ彼の偉大な精神に景仰したい。
→　筆者は彼の生前全く報いられなかったその業績に対しせめてもの恩返しにと村長

を動かし、村葬（第１号）をもって遇すべきだと進言し、‥盛大な葬儀が営まれた事はささやかな慰めであった。

(2)　南風原驍（１８８９年　明治２３年生）
・カーヌイリー　マーラン船　村で最も裕福な家に生まれる。
・明治３５年　渡名喜尋常小学校（４年制）を卒業し、那覇高等小学校へ進学
・明治３９年　沖縄県立師範学校へ入学　明治４４年３月卒業
・４月に渡名喜尋常小学校の訓導として赴任
・本村の中学校卒業生の先鞭をつけ、その後の中学校進学に大きな刺激を与えた。
・大正４年　南風原尋常高等小学校勤務
・大正８年主席訓導（現在の教頭）として渡名喜尋常小学校に赴任
→　水上運動会の提案者かも
・大正１０年　若冠３１歳で校長　大正１５年まで７カ年
・海外雄飛　・・　島を飛び出る強靭な意志と希望を与えた。
・沖縄文化研究
・大正１４年　東京板橋尋常高等小学校の訓導

(3)　宮平清一（１８８９年　明治２３年生）
・１９１１年（明治４４年）生　　渡名喜唯一の画伯
・１９２４年（大正１３年）　渡名喜尋常小学校卒業　高等科へ
・１９２６年（大正１５）　沖縄県師範学校へ入学
・１９３１年９月　渡名喜尋常高等小学校に訓導として赴任
・１９３４年（昭和９年）　玉城尋常高等小学校へ赴任
・１９３９年（昭和１４年）東京市立本郷高等小学校訓導
　　本郷第一国民学校　都立城東化成女学校　同城東工業高等学校・・・
・日展入選　中央画壇で異才を放つ　４６才で逝去

(4)　比嘉松吉（　　）

⇒ 比嘉筆助の写真（ネット写真等）　各４氏の業績の紹介　　ハブの呪文
井戸の造り方（写真　模式図解）　井戸枠の展示　経歴　機関紙　絵画
各４氏の写真

１９　村と生活
(1)　身売りのない島
・渡名喜の人々はどのような窮地におかれ、たとえ飢え死にしても身売りを極度に恥とした。明治以来身内をしたということを聞かない。
・上納の未納があるとか困窮者があると親類縁者や与が負担したり援助したりした。
(2)　盗みのない島
・「風俗はその容貌にも知らるる如く淳朴にして、・・・」
・沖縄県下で比類のない平和な村であるし、盗みのない評判となり・・
・納税の実績が殆ど百％官能
(3)　イーマールー（ユイ　共同作業）・タルミンチュ
・一人でできない仕事を組みで

・一人で耕作していては怠けることがあっても、ユイでやれば組合相互で励ましあいながらするので能率も上がる。
・農民政策のひとつ・・貢租の納付
・本村では穴柱屋から貫木屋にかけて、多くの労力がいる。

(4)　ブー（賦役　夫役　　公役）
・公用のための労力
・溜池の造成
・アマンジャキの造営
・カーラ（排水路）の設営
・防風林・砂防林の植え付け　　等

⇒　「身売りのない島」「盗みのない島」「イーマールの心の島」として「島の美徳」としてパネル表示等大きく紹介　イーマールによる家造り・アマンジャキ造りの写真・絵表示・図解

２０　衣食住

(1)　服装
・芭蕉布や木綿の着物
・仕事着
　スディギラー（バシャースディギラー）
　ヤリブカー
　カシガーギン（ンミギン）
・履物　　サバ　地下草袋　アシジャ（下駄）
・防寒着　ワタイリー　ヤリブカー

(2)　ハジキ（針突　入墨　文進）
・ハジキをしていない白手であの世に行くと葦の芋を握らされる難行を強いられる。
・本村ではハジキが既婚者の印であったということはなかった。
・ハジキをしないと唐、大和、オランダに連れて行かされる
・一種の装飾　年齢は１４・５歳から２２歳まで
・明治３２年に刺文禁止令

(3)　食
・ヒティミティムン（早暁の食）　昼食・アシー（朝飯）　夕食・ユックィー（夕飯）
・太古の人々の主食　　ヤム（山芋　とろろ芋）　タロ（田芋　チンヌク）
・王朝時代から明治にかけて麦や粟が主食・・2000 年前　南方諸島から伝来
・ムギ（麦）
　田の少ない島では稲作よりもムギ・粟・黍・扁豆が主要作物
　王朝時代から明治にかけて麦や粟が主要な貢租
・アワ（粟）
　サクアワ　白粟　・・５種類
　昭和５０年から黍粟の試作　・・増加
・クミ（米）

・ンム（芋）
　チヂンム　ウムクジの作り方

ンムニー

・ヒトゥク（蘇鉄）
　１４４１年（嘉吉元年）　ジャワから移植
　ヒトゥクダキー
　クガーダキー
・魚貝類
　主な魚の名前（和名　方言名）　生息場所
　貝類の名前採集場所
　食べ方
・豚肉

(4)　住
・洞穴住い
・草屋住い　　長い草屋住いの後　掘立小屋
・穴屋掘立小屋　　１室　前面は軒がやや高く後面は地面に垂れている
・渡名喜では大正の初めころまで穴屋が５・６軒あった
・王国時代の掘立小屋には床はなく土間に草を敷きその上に莚
・ヌキジャー（貫木屋）
　明治以前から石場建（柱を礎石の上に立てる）の貫木屋を建て・・茅葺
　明治２２年　百姓に対する建築材料、規模等の制限が解かれる・・茅葺から瓦葺
　明治２５年　島元屋　　大正の中期までには村内全戸が完成
　１６６７年（寛文７年）羽置仕置において資料建材が制限されていた
　王府時代には屋敷と家屋面積や家の構造、建築用材が身分によって制限
・風変わりな屋敷
　王国時代の穴屋住居の頃から、できるだけ屋敷の土砂を運び出し、低くし
　屋敷を掘り下げることが出来る者はハタラチャー（働き者）できない者はヤクン
　　タタン（怠け者）としてそしられた。
・石垣
　王府時代　いなか百姓家には身分に合わないと石垣を造ることはご法度
　廃藩置県後石垣囲いが許される
・ソーンジャキ
　道路から家の内部が見えないように
　悪風よけ
・メーヌヤー（前の家　アシャギ）　　ヒリョーグヤ
・畜舎　　母屋のカミジャと反対側か裏側
・フル（便所）　　王国時代から大正にかけてどこの家でも豚小屋と兼用
・家造りの苦心談
　稼ぎの多い人で１０年から２０年　　少ない人は一生かかっても家を建てること
　　ができず買い求めた用材を子に譲って完成する事も珍しくなかった。
　明治末期までには約半数が、大正中期には約９０％が瓦葺貫木屋に変り大正の
　　中期には全戸が完成し、赤瓦の美しい村の佇まいは、おそらく沖縄のどこにも見
　　られない景観であったであろう。

⇒　服装は沖縄の一般的なものとして紹介・昔の服装の変遷　　ヤリブカーの展示
カシガーギン・海ギン（米軍配給毛布で製作）　ワラジの展示　チャンチャンコ
クバ笠　等の展示　ワラジ草履の製作体験コーナー　　ハジチの写真・各部名称
ヤム（山芋）・タロ（田芋）の生えている写真及び比較写真
ミーフーダー（吉元屋の田）の写真と場所の位置図
ウムクジ・ンムニー・クーウムニーの作り方（図解　写真　映像）実演コーナー
ヒトゥクの実物写真・生えている写真　ヒトゥクダキー・クガーダキーの造り方の映像　実物の展示）
魚介類の写真・生息場所の図解・漁獲方法の紹介　和名と方言名
渡名喜の海の地名（明かりで点灯表示）
サンゴ礁海域の地形・魚介類の生息場所の模型図
住居の変遷（模型と図解で表示）　石垣・ソーンジャキ・畜舎・フルの写真と場所の表示・活用方法等の図解説明　　家創りの苦心談話の紹介
縄文時代からの住居の変遷を模型や図解で紹介
東貝塚の模型　掘っ建て小屋　ヌキジャーの模型　　ヌキジャーの部屋・間取り・作りの説明

２１　農業

・首里王府は渡名喜島の過剰な人口を強制的に減らし即ち「寄百姓として真和志間切り古波蔵村に移住させ農地開発に当たらせたが、渡名喜の人々は農耕が下手で・・
・明治１０年代に人口が増え始めた。
・この島でも貧富の差が生じたが、仕明地を多く持った者とそうでない者によって分かれた。

(1)　甘藷の普及

・１６０５年　野国総管が福州から鉢植えを持ち帰り儀間真常が広める
・ウムの種類
　タイワナー　　サクガー　　ハナウティー　　沖縄１号　　沖縄百号
　戦後　ベニイモ　　マタサカー　　タンメー
・芋の栽培は長年同種類では病気が発生する。
・渡名喜の土地は一言でいえば全く休む暇のない土地
・生産高１９６２年に作付面積６１ヘクタールで７６万８千キロ
・１９６３年　バイラス病が発生し５０％減

(2)　肥料

・甘藷の肥料は主に堆厩肥で遠い山畑などは緑肥を用いた。
・土地を肥やせば作物が作れない土地
・戦後は１９５０年から家畜の飼育も減り、堆厩肥と土壌の関係を忘れてふんだんに安易な化学肥料を使い出し、不作が続きバイラス病がアメリカから運ばれた。

(3)　アワ（粟）

・ウル（粘り気の少ない種類）　アカアワ
・モチ（糯）　ムチアワ　シルムチャー
・キミアワはマージンとも言う。
・粟は主食として他の穀物と混ぜて利用するか餅にする。
・本村の土壌は粟作に適している。品質も良い。

(4)　トーフマミ（大豆）

・渡名喜の砂質土は大豆栽培に最適

(5)　ヒル（にんにく）

・塩漬けにして茶受け　カティムン

・１９８０年（昭和５５年）　出荷量８トン　総売り上げ　５００万円

・ニンニク栽培に最適

⇒　粟とモチキビの写真と図解（比較）　特産物の変遷と収穫量と収穫高（データ　グラフ化）　農家の戸数

２２　畜産

(1)　ウシ

・明治 30 年代までは畜舎は屋敷内で飼育はすべて放牧

・明治の末になると厩肥を作るため放牧をやめる。

・大正年間を通じて村役場で堆厩肥の増産に力を入れる。大正 6 年 236 頭

・大正末年　　渡名喜における畜産の最盛期

(2)　ウワー（豚）

・1300 年から 1400 年前　貝塚前期から奄美沖縄で飼育

・渡名喜でも遠い昔から飼育　出土品の中に豚の骨

・ウワーガキが残っている。

・明治 30 年代　アシゲー豚（交代豚）を売る。

・くり船を２隻組み合わせ　アダンの幹で檻を作り子豚を入れ麦わらで莚を編んでその上を覆う。

・南島風土記によると・・１戸平均３頭　渡名喜豚の名著聞し

・飼育熱が著しく低下　　その理由は・・

(3)　イージャー（山羊）

・戦前まではどの家でも２・３頭を飼育

・大正中期　最盛期　・・村役場の産業奨励策　運搬船　肥料として

・戦後は農業の衰退とともに著しく減

⇒　種豚の種類と写真　　豚・牛・ヤギの生産量と生産高　　豚の解剖図と部位の図解

２３　漁業

(1)　古代の漁法

・漁垣（イシュガキ）

　５つのイシュガキ　　すべて部落共有

　マキヨ毎に１つか２つのカキをもっていた。

(2)　採貝

・チジャラ　カタンナ　シビ　ホーラ貝　ガジジャーンナ　ギブ　ヤクゲー　チビトガヤー　アマンナ　ハマグリ

・明治の末頃　カタンナ　チビトガヤー　ヤクゲー

・一隻に３名

・配当８円　　一家の年平均　２０円

(3)　銛突漁法

・ウギン　トウジャ　ナガヤイ　パチンコ

(4)　網漁法

・タタキンチャー

・アギー（アギヤー）昭和の初めころまで

・ウンジャキ　　イノーシュギ　　キワダ　　ニーナムシグシヤミ
アムルウーイ　　ウルワイ　　定置網漁　　ウチャミ
クチミキ　　アングシ　　シジャーミ

(5)　釣漁法

①　いか漁

・仲里村真泊にいか（トビイカ）漁

・釣り手が２・３人　ヤーバンとして小学校を終えた少年１人
渡名喜のイカ釣り舟の数が１００隻あまり・・
明治３７・８年以降鰹漁に就労したのでいか漁は次第に衰退大正初期には絶える。

②　鰹漁業

・フーシン（帆船）

・キカイシン（機械船　機関船）

・鰹漁業組合の編成

・機関士　運転士免許

・鰹漁船の１日　ジャコー捕り　漁場

・鰹の釣り上げ図

・鰹節製造　　製造工程　　頭を切り離す　煮頃　サカボージャー　ミオロン

③　１本釣　延縄　ひき縄漁

・１本釣延縄漁のスニ　　１本釣り釣り糸

・底延縄　　流し延縄

・ひき縄

(6)　漁業と気象

・方位　方位図

・星名

・風名　ニングァチカジマーイ　　ボーシューベー　　カーチーベー

・天気の予測法

⇒　イジュガキの場所と現在の写真・漁法の図解　　貝の展示（名前　生息場所等）
銛の展示　　銛漁法の映像・写真　　網漁の写真・図解
タタキンチャーは実演映像　　イカ漁は大きく取り上げる（図解・写真・説明）
各種漁法の図解説明及び漁獲物の紹介（図　表示　説明）
漁業と気象の図解　　星名
カツオ漁は大きく取り上げる（映像　写真　鰹節の製造過程　製造実演映像
鰹節の展示　　カツオ釣り道具　　製造道具の展示等）

２４　年中行事・人間の一生行事

(1)　各月ごとの行事

・別添資料参照

・旧暦で月ごとに、順を追って

(2)　人間の一生行事

⇒　漫画化して表現　イラストで表現　写真
小学３年生の調べ学習の教材として活用

２５　葬制と墓制
(1) 葬制
・葬具　　弔旗　棺　ヤジョウ　等
・野辺送り
・ナーチャミー　　マブイワカジ
・ナンカ焼香
・洗骨
(2) 墓制
・墓地の分布図
・墓の分類及び構成員
⇒　場所　墓の位置図示と写真　　野辺送りは平成の始めまであった　葬式のイラスト化　葬制の日ごとの経過図示　洗骨の方保等大きく取り上げる　墓の変遷　埋葬・風葬・火葬　メーシラシを表示

２６　民俗
(1) 御嶽信仰
・大昔、マキヨの時代には集団ごとのウタキを祭っていた
・本島に４つのマキヨ　出砂島に４つのマキヨを祀っていて
・マキヨとマキヨの間に婚姻　養子縁組　次第に大きい血縁集団
・大御嶽（里の御嶽）を村の共同の守護神とするようになった。
・ウタキの神と村人とは血のつながった親と子　　ウタキの神は祖霊神
(2) 里のウタキの構造
(3) ヒヌカン（火の神）信仰
・毎月のチーチャチ（朔日）とジューグニチ（十五日）は火の神の定期の祭り日で
・チューヌ　ユカルヒ　・・・
(4) 祖先崇拝
・仏壇
・グショーやアマダイ（後生は雨垂のように近い所・・）
(5) 俗信
・ハマリ（浜下り）　・シマサラシ
・チキシ（つき石）
・マブイグミ（魂籠め）
　ジョーマブイ　　フルマブイ
・ヤシキウガン（屋敷御願）
　チューヌ　ユカルヒ　マサルヒーニ　・・・
・石敢当（カンデーイシ）
　場所　意味
⇒　御嶽の成り立ち　殿と御嶽の関係　シマノーシとの関係を明確に示す。
宗家・根人・殿頭（クビリ　イイジョー　エーグニ　イーヌヘーバラドンチ）
里の御嶽の構造（p 332）は存在が大きいので取り上げる・写真　古代村落の構造（p 333）は沖縄本島と共通　　ヒヌカン信仰は取り上げる　チューヌユカル

ヒ（p 336）は表示　祖先崇拝は大きな存在　　スーコー行事は表示　ハマリ（浜下り）は説明　チキシの写真・場所・持ち上げ体験　マブイグミ・ヤシキウガン・は表示　石敢當の意味・場所・写真

２７　祭祀

(1) シマノーシ祭

・シマノーシの意味　　・シマノーシ関係図

・トゥン（殿）

４つのマキヨが１つになって村共同体をつくり、各根人は今の殿のある場所に移り住む。

・シマノーシ祭の儀礼の過程

・ユレーヌユバル

・アマガシ作り　甘酒　　ミキ

・神人　ノロ

(2) ニライ・カナイとオボツ・カグラ

・トゥンの構成員

(3) 綱引

・粟や稲の収穫が終わった６月２５日はハチシック（初節句）と言い、また、カシキーウイミ（強飯節句）といってカリー（嘉例）な節句

・ガーイの歌

・ンバニクーイ　　歌

⇒　シマノーシは１つのセクションとして取り扱う　学術的な意味・由来・映像
神女の役割・順路・順位　　アマガシ作り・ムロン・造り方体験・説明
トゥンの構成員（P 408 ～412）　沖電アワーで紹介映像

２８　歌謡

(1) 出砂節

・歌詞　説明　歌

⇒　原歌・歌詞・説明・楽譜　　ウンダルーの歌・ビデオ　ウバニクーイの歌も表示

２９　伝説

(1) ナキジンガー由来

(2) ハタクヤーガマの由来

⇒　ナキジンガー由来・ハタクヤーガマの由来は絵本を作成し展示
渡名喜の民話集の展示　　ことわざは冊子にして展示
子どもの遊びも冊子作成し展示
組踊は沖縄県各字で演じていた